

さんむのふるさと散歩

NO.48

幻の「武射寺」

今から約千三百年前、当時の人々が堅穴式住居（縄文時代から平安時代に多かった家）で暮らしていた頃、真行寺の台地（現在の大富小学校から北に見える台地）に、瓦葺きの屋根を持つ立派なお寺が出現しました。

お寺の名前は「武射寺」と呼ばれています。

お寺の本堂には金色に輝く仏像が安置されていたことでしょう。

お寺の更に先には、武射郡衙（当時の役所）の建物と、倉庫群が整然と並んでいました。



▲調査中の武射寺の建物跡
(建物の基礎に瓦を敷いています)

(写真は千葉県歴史資料編考古3より)

その様子を、初めて周辺に暮らす村人が目にした時の衝撃と言ったら、現在に例えて言うところ、「昔ながらの風情を残す下町の一角に、東京スカイツリーが突然出現した」と同じくらいの近未来体験、または噂にしか聞いたことのない「都」を想像させるのに十分な景色だったと思われまます。

ではなぜ真行寺の台地にそのような建物群が建てられたのでしょうか？

その答えは、真行寺がこの地域（当時の武射郡、現在の山武地域の大部分に当たる）の中心地だったことがあげられます。

その証拠として、真行寺と同じ台地の北側一帯には、二百基近くの古墳が造られ、さながら「古墳ベルト地帯」が広がることがあげられます。

その中の一基、胡摩手台一六号墳は全長が百mを越す巨大な古墳で周りに二重に堀を巡らすなど、規模や形態が周辺の古墳と比較して抜きん出ており、武射一帯を支配した「武社国造の墓」との関連性を指摘されています。

真行寺の台地に「武射寺」が建立されたのは、胡摩手台一六号墳が築

造された時代より後の、奈良時代のことです。

しかしこのことは、地域の支配者が古墳時代からこの台地に、権威の「シンボル」である古墳を造り、その後継者が、また同じ台地上に武射郡衙と武射寺を造営した事実にはなりません。

奈良時代に、山武地域の行政・仏教文化の発信地として栄えた真行寺の台地は、現在は畑や山林が広がるのどかな農村風景となっています。



▲武射寺の中心的建物があった場所
(写真中央の横に広がる背の低い植木畑)

関 歴史民俗資料館

☎ (82) 2842